
共同研究の経過と概要

朝岡康二

1 目的

民俗学研究的資料には有形・無形のものが含まれるが、これらを資料化して研究を推進する手段・方法について、必ずしも十分な検討が行われてきたとはいえない。すでにたびたび指摘されてきたことであるが、民俗学研究では聞き書き・言語資料に依存する傾向が強く、それ以外のメディアを研究資源として活用しようとするようになったのは、近年のことである。

それが現在では、聞き書き・言語資料の利用だけでは不十分とする考えが一般的なものとなり、多方面から実物・映像・写真・図面・地図・絵画などを積極的に位置付ける必要があると指摘されている。

しかしながら、これらを有効に活用するためには、個別のメディアの性格やその有効性（あるいは限界）について十分に検討した上で、学界に共通する素材に対する認識ないしは利用の枠組を構築することが必要であると考えられる。いわば、多様なメディアを資料論的に整理して、その有効な利用手法を確立しなければならないのである。

以上のような観点に立って、本研究は、民俗学研究（ないしはそれに隣接する研究）に活用しようとするメディアのなかで、写真・図面・地図・絵画などを「画像資料」と位置づけて中心的な対象とし、併せて実写動画を「映像資料」として視野に入れつつ、メディアと研究との関連について多方面から基礎的な検討を加えることを目的としている。その上でさらに、これらのメディアを実際の個別研究に生かす試みも行い、民俗学的研究におけるこれらの利用法の基礎的な把握を試みるものである。

2 研究期間と組織

(1) 期間

1998～2000年度

(2) 研究組織（※は研究代表者）

[共同研究員]

阿南 透 江戸川大学社会学部（社会学）

石村 真一 九州芸術工科大学（技術史）

植村 俊亮 奈良先端科学技術大学院大学（情報科学）

梅野 光興 高知県立歴史民俗博物館（民俗学）

-
- 河野 通明 神奈川大学経済学部 (社会経済史)
小林 忠雄 東京家政学院大学 (民俗学)
近藤 雅樹 国立民族学博物館 (民俗学)
名久井文明 岩手県立青山養護学校 (民俗考古学)
茂木 栄 国学院大学日本文化研究所 (映像民俗学)
照井 武彦 国立歴史民俗博物館名誉教授 (情報科学)
安達 文夫 国立歴史民俗博物館情報資料研究部 (情報科学)
※朝岡 康二 国立歴史民俗博物館民俗研究部 (民俗技術論)
上野 和男 国立歴史民俗博物館民俗研究部 (社会学)
福原 敏男 国立歴史民俗博物館民俗研究部 (歴史民俗学)
[ゲストスピーカー]
富澤 達三 足立区立郷土と天文の博物館 (社会史)
山本 光正 国立歴史民俗博物館歴史研究部 (近世史)
山田 慎也 国立歴史民俗博物館民俗研究部 (民俗学)
香月 洋一郎 神奈川大学常民文化研究所 (民俗学)
植木 行宣 京都学園大学 (芸能史)
久須美雅昭 トヨタ財団 (資料論)
孝 寿 聡 博物館映像学研究所 (映像論)
宗村 泉 トップラン印刷博物館 (博物館学)
岡田 正子 (株)東京シネマ新社 (映像論)
岡田 一男 (株)東京シネマ新社 (映像論)
新谷 幹夫 東邦大学理学部 (情報科学)
真島 俊一 TEM研究所 (民俗技術論)

3 研究会の経過 (*印はゲストスピーカーを表す)

第1回研究会 1998年6月19・20日 国立歴史民俗博物館

研究代表者挨拶

共同研究員の自己紹介

朝岡康二 「民俗学的画像研究の基礎」

福原敏男 「歴史画像とその利用」

第2回研究会 1998年9月25・26日 国立歴史民俗博物館

上野和男 「民俗記録写真について」

河野通明 「四季耕作図について」

茂木 栄 「映像民俗学のこれから」

フリーディスカッション

第3回研究会 1999年1月30・31日 国立歴史民俗博物館

名久井文明 「植物性素材の組織を表す情報媒体の限界と可能性」

-
- 近藤雅樹 「明治期の特許情報に表れる洋傘等の開発状況」
石村真一 「中世～近世の絵画資料にみる木製容器の形態・構造について」
*富澤達三 「ファイルメーカー Pro を使用した画像データベースについて」
第4回研究会 2000年6月9・10日 国立歴史民俗博物館
梅野光興 「盆行事研究における画像の利用」
福原敏男・朝岡康二・*山本光正 「絵巻のデジタル画像化の試み」
小林忠雄 「アルバムにみる民俗」
照井武彦 「江戸図屏風（画像処理の一般化）」
第5回研究会 2000年10月29・30日 国立歴史民俗博物館
阿南 透 「写真にみる民俗」
*山田慎也 「葬送儀礼と写真」
*富澤達三 「画像データベースとテキスト表示」
第6回研究会 2000年2月11・12日 国立歴史民俗博物館
名久井文明 「民俗学的画像に描かれた編組品」
石村真一 「ホカイの形態を歴史的画像から見る」
*香月洋一郎 「紙芝居における画像表現」
福原敏男・*植木行宣 「長崎クンチの映像表現について」
第7回研究会 2000年6月30日・7月1日 国立歴史民俗博物館
植村俊亮 「デジタルメディアとデータベース（奈良先端科技大の研究状況）」
安達文夫 「江戸図屏風のデジタル・プレゼンテーション」
朝岡康二 「絵画・写真等の利用と批判について（衣服をめぐる）」
フリーディスカッション
第8回研究会 2000年9月29・30日 国立歴史民俗博物館
*久須美雅昭 「デジタル書誌学と画像DBツール」
*孝寿 聡 「民俗映像批判の方法（民俗芸能をめぐる）」
石村真一 「商店街の歴史を撮る」
第9回研究会 2001年1月11・12日 小石川・トッパン印刷博物館
*宗村 泉 「印刷博物館の目的と展望」
*岡田正子・岡田一男 「Beautiful Japan を読み解く（映像批判の方法）」
*富澤達三 「画像データベースの編集について」
第10回研究会 2001年3月24・25日 国立歴史民俗博物館
*新谷幹夫 「コンピュータグラフィックス技術と画像資料」
*真島俊一 「画像集積と画像データベース（和船の写真資料を中心に）」
総合討論 「研究成果の集積・研究報告の刊行をめぐる」

4 研究の概要

本共同研究を行った3年間は、デジタル技術の社会的展開が急速に進展した時期であったが、こ

のことは事前に想定されたことでもあった。歴博においても、この時期を対象に事前に策定した「情報システム基本計画」において、「画像データベース」の本格的な構築に取り組むこととされていた。

すでにその当時、デジタル技術を用いた画像などのデータベース化が、各種の教育的場面において有効であることは広く知られており、そのために教育を目的とした画像集積や利用方法の開発がメディア教育開発センターなどの各機関において推進されていた。同様に、歴博においても一般公衆に供する画像データの集積について一定の実績を持っており、その有効性についても認識していた。

しかしながら、このような社会的実践の延長線上に、人文学における「学術的利用」を位置づけようとするのは、それほど容易ではないと思われる。画像・映像の「学術的利用」には様々の検討すべき課題がまだ未解決のまま残っているからである。ここでいう「学術的利用」とは、研究の方法や内容に関わるものだけではなく、研究の形式的な側面（たとえば作品化や発表形式など）にも関わっており、しかも両者はそれぞれ個別に取り扱うわけにはいかない相互関連を持っている。

たとえば、文字を基本にしている学術論文において、文字と同様に画像や映像を「引用」することは、メディアの形式的な相違から困難をとまわざるをえない。両者を上手に結合しているかにも見える一般メディア（新聞・雑誌など）の経験的方法は、異なるメディアが混在しているにすぎず、そのままでは統一的な論理を必要とする学術論文にふさわしい方法とはいえない。しかし、だからといって、画像から得られる情報を言語に置き換えて示すことも、また容易ではない。というよりも、本来の画像資料の意義は、言語化しがたい部分にこそあると考えられるから、画像資料の言説化とは実は画像解釈の提示である。

このように、言説と文字の論理で構築されている人文学研究と画像・映像の関係は、本来的に厄介な側面を持っていると考えてよい。その上さらにいえば、今日的な画像の「引用」においては著作権などの複雑な権利関係をも考慮しなければならない。新たな問題も生じているのである。

本共同研究は、以上のような多様な問題の存在を視野に入れて計画された。そこでは、当面の課題としての「画像」、その先に位置づけるべきものとしての「映像」を対象にして、研究のリソース・作品化の手段として基礎的な検討を加えるとともに、今後の利用の可能性を探ることを目的にした。したがって、本共同研究での個別研究者の発表は、デジタル技術に基づく画像化・映像化、そのデータベース化などによって生じる技術的な問題、研究における各種画像・映像の利用例、画像・映像の書誌学的な批判、などに及び、さらには、それらを具体的なモチーフに結びつけた上で問題を提起する、といったものが多かった。そのために個別の問題に拡散するきらいがないわけではなかったが、「基礎的研究」という本共同研究の位置づけからして、それはやむをえないことであった。

いずれにしても、個別に提示される利用方法とそこから生じる問題点は多岐にわたり、これらを取りまとめて全体的な結論が得られる、というわけにはいかなかった。次の段階では、なにか特定のモチーフを設定することによって、詳細な議論を尽し、その結果を論文として示す必要があると思われるが、現状はこれまでの議論の一端が共同研究員の論文に反映していることをもって成果と考えなければならない段階である。

なお、最初に指摘したとおり、デジタル技術の急速な社会的展開は当初から予測されていたこと

ではあるが、それにしてもその進展は目覚しく、我々の予測をはるかに超えていた。後半に入ると、研究会のモチーフが超高精細画像や映像資料に偏っていったのは、この社会的状況に対応せざるをえなかった当時の事情を反映していると考えられる。

いずれにしても、人文学における多様なメディアの「学術的利用」はようやく可能性がみえはじめてきた段階であり、引き続き今後も息長く研究を継続していく必要があるといえる。

(沖縄県立芸術大学，国立歴史民俗博物館共同研究員)